
繋がる魂

水上踏吾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

繋がる魂

【Nコード】

N1579T

【作者名】

水上踏吾

【あらすじ】

(趣味人倶楽部、創作広場での投稿より転載)

晴れることのない霧が立ち込めるある湖の辺にやってきては、切なる思いを込めて光の矢を投げ込む「僕」。僕の記憶は不確かで、湖の底に顔も名前も忘れてしまった大切な人がいることだけは憶えている。

湖底では、同じく記憶が不確かになって、ただ僕が投げ込む光の矢を待ち望むだけの「私」。何の魔法によるのか、生きはしているが

湖底に囚われて上がっていくことができない。できるのは手で泡粒を作って光の矢に答えることだけ。

ある日、僕の光の矢に返事が無くなった。泡粒が返って来なくなつた。狂つたようになって身もだえ苦しむがどうしても湖に入ることだけはできない。息も絶え絶えの僕は、一筋の光明にすぎることにする。それは、死者が集うと言われる火の山に行けば、ひよっとすると「私」がいるかもしれない、というもの。僕は決心する。火の山に行こう・・・。

湖畔にて

鏡のような湖面を滑ってくる風に耳をすまし、僕は微かな音も見逃すまいと

目をつぶって集中した。小さく弾けるような音を耳にしたと思って目を開け

ると、果たして小さな泡が途切れることなく湖面に浮かび、小さく弾けて

さざ波を立てていた。大きな泡も浮かんできて、大きく揺らす。

僕の心の湖面にも喜びが浮かんであふれていく。同時にほっとする思いで心

を撫で下ろす。

きみはまだ生きているんだね。そこにいるのかい？

僕は手に持っている光の矢に切なる思いを込め、湖面の静寂を乱さないよう

気をつけながらそっと投げ込む。

上がってくる泡粒が多くなったような気がする。

僕の心は喜びで満潮になってしまった。あふれる思いできみの名を呼ぶ。

呼ぼうとするが、僕の唇から大切なきみの名を放つことができない。
半開きにした口をわななかせ、僕はついに口を閉じてしまう。

きみの名は、湖面を覆う白い霧のように、見通せない霧の記憶の彼方にある。

必死に君の顔を思い出そうとするが、それもまた朧な霞の記憶。ただ、忘れて

はならない、絶対に忘れるなという僕の心の奥の叫びが、きみの存在を暖かな

思いとともに繋ぎとめている。

僕はまた光の矢を投げ入れ、返ってくる泡粒に聞き耳を立てる。

悠久の時間を過ごした後、僕は踵を返す。

また来るからねと心の中で呼びかけながら。

湖畔にて（後書き）

十年ぶりぐらいで書いた二度目の小説です。

ひよんなきっかけで一週間ぐらいで書き上げました。

我ながらびっくりです。

少しでも皆様の心を熱くできれば幸いです。

水底から

私の返事は届いたかな？

あなたならきつとわかってくれるわね。

この泡粒は私だっことを。

私ははるかな高みに揺らめく水面に向かって手を差しのばす。

指先からいくつもの泡粒たちが離れ、私の思いを乗せてゆらゆらゆらゆらと懸命に上っていく。

私自身はどうしてもこの湖底を離れることができない。

不思議な力が私を生かしているけれど、私は永遠の虜囚。

水草の一本も無い岩と白砂だけの暗くて寂しいこの場所に、私はひとりぼっち。

でも、たったひとつ、あなたの光の矢だけが私を慰めてくれる。

あなたを思っで正気でいられる。

あなたの顔も名前もはや忘れ果てていても、不確かなあなたの面影にすがりつつ、ともすると冷えて

いく私の心をあなたの記憶で暖める。

冷たく冴えた湖底に散らばるあなたの光の矢を私は拾い集める。

あなたの光の矢は闇夜を照らす松明のよう。

松明ほど明るくはないけれど、いつまでもほのかな明るさを失わない。

いつまでも光を失わない光の矢は、いつまでも私の心を暖めてくれる。

私はその矢をそっと胸に抱きしめる。

光の矢に宿るあなたの思いは優しく私の胸を暖めて、私の胸もほのかに暖かくなるけれど、時に焦げそ

うなほど熱くなるのは私のせい？それともあなたの光の矢？

どちらにしても私は嬉しいの。

嬉しくなって私はぎゅっと光の矢を抱きしめる。

わかるかな、私の泡には違いがあるって。

手を早く動かすと細かくなって、まあるく動かすと大きくなるの。

出したり止めたり、あなたの光の矢が水面を破って静かに沈んで来るたびに、私の手は素早く動く。

あなたならきつとわかってくれるでしょう。

私はため息をつきながら岩の上に腰を下ろす。

そして、あなたの光の矢が降って来るのをじっと待つ。

ぼんやりと、揺らめく水面を見つめる私の目からは涙は流れない。

流れるそばから私の涙は冷たい水と溶け合って、どれが涙なのか水なのか。

私はうつむいてしまう。そしてハッと顔を上げる。

喜びは一瞬。虚しさが取って替わる。

私は耐えられなくなるけれど、どうしようもない。

だって だって、私は上れないもの。

絶望

どうしたんだろう、どうしたんだろう…。

僕の心は焦燥に苛まれ、どうしようもなく顔が苦痛に歪む。

鏡のような湖面は、まさに鏡のように静まり返っている。

一粒の泡粒も上がって来ない。

いったいどうしたんだろう？

僕はあらん限りの光の矢を叩き込むように投げ込んだが、激しく波立つ水面はたちまち元の静けさに戻

り、沈黙を続けた。

僕は必死に水面を透かし見る。

しかし、鏡の湖面は霧の白さばかりを映し出し、僕の視線は上滑りしてきみの姿をとらえられない。

僕は、内なる力が爆発するまま大声で喚き、剣を抜いて湖面に切りつけた。二度、三度…。

きみの名を呼びたかったが名前が出て来ない。

言葉にならないうめきを振り絞って、岸边を熊のようにうろつき、文字通り地団駄を踏んで砂を蹴り立

て、腕を振り回した。

僕は何度も湖水に飛び込もうとした。

そのたびに、僕の心の奥の冷徹なる部分が、飛び込んではいけない。飛び込んだら死よりも恐ろしい結果が待っている、二度とあの人に会えなくなるぞ、と僕を引き留めた。

飛び込もうとするたびに体が止まった。

体が飛び込むことを拒否した。

やがて僕は疲れ果て、がっくりと膝を着いた。

絶望が僕を打ちのめして重くのしかかり、ついには打ち倒した。

無くしたかもしれないものの大きさを思うと、心が切り刻まれてすり潰される。

口の中に血の味がいっぱいに広がる。

我知らず僕の口から悲鳴がもれ、僕のこぶしは岸辺の砂を叩く。

子どものように身悶えして僕はむせび泣いた。

僕はきみの死をほとんど確信していた。

狂おしく思考を巡らす僕の脳裏にひとつのイメージが浮かんだ。

火の山。火の山は死の山。死者が集うと言われる山。

生者が死者に会うには火の山に行くしかない。

こんなところでもういないかも知れないきみを待っているのは、もうごめんだ。

狂い死にってしまうのがオチだ。

火の山に行ってきたきみがいなかったらそのときは…。

いずれにしろ、僕は動いていた。じっとしているのはいやだ。

行こう！火の山へ。。

火の山

長かった。

目の前にそびえ立ち、長大な煙と炎を上げる火の山を目の前にして、
ここまでの長い長い道

のりを振り返って僕は目をつぶった。

得難い仲間たち。 貴い犠牲。 死力を尽くした闘い。 次々とまぶたの
裏に浮かんでくる。

自然と涙が出てきた。

僕のために皆が力を貸してくれた。 僕の個人的な願望のために。

笑いながら、どうってことないさ、と死んでいった仲間の顔は一生
忘れない。

あいつらにもこの山で会えるかも知れないと思うと、笑みが浮かん
だ。

早く会いたい。 もちろんきみにも。

ところが、頂上への道は想像をはるかに超えるものだった。

最初はまだまばらに生えていた草木も登るにつれて消え、ひねこび
白茶けた枯れ木が、岩塊だらけの斜

面に骨のように散らばるだけになった。

火の山は絶えず振動して頂上の方からは不気味なごおっという音が聞こえてくる。

茶色い煙が厄介だった。

風に吹かれて煙の塊がやって来、包まれたときに、なんとも言えない悪臭だと思ったなら瞬間に意識が飛

んでいた。

致死性のガスだった。

それ以来、茶色の煙がやって来ると息を詰めてやり過ごしている。

目も痛くなるので目をつぶってうずくまる。

幸い我慢するのは短い時間で済んだが、頂上の近くになれば、もっとガスは濃密になってくるだろう。

不安になるが仕方がない。

頂上に着くまで死ぬわけにはいかない。死んでたまるか。

じりじりと頂上へ近づく。

何度も石ころに足を取られ、転んで体のあちこちを傷つける。

革のブーツはボロボロになって破れ、足は血まみれの棒に成り果て

ている。

意識が朦朧とする。

たまに、火の付いた岩が近くに落ちてくる。

当たれば即死だろうが、もう恐怖を感じるには意識が麻痺していた。

一度、すぐそばに落ちた岩が破裂し、破片が僕の被っていた兜を吹っ飛ばした。

目の前が真っ暗になり、もう終わりだと思ったのを覚えている。

奇妙に平穏な感じで、やっと眠れると気が遠くなりながら安堵していた。

気がついて目を開けたが目の前が真っ赤だった。

目に血が流れ込んでいる。

目を拭ってから、立とうと思ったが立てない。

足に力が入らない。

たとえ立てたとしても歩けないだろう。

周りはガスが充満していた。地面に近いところでしか息ができない。

僕は両手両足で四つ這いになり、這い進んだ。じりじりと。

回りは耐え難いほど熱い。

火口は近いのだろう。ぐつぐつとシチューが煮えたぎる音がする。

地獄の大釜で煮るシチューを想像した僕は力なく笑った。

ちくしょう！みんなどこにいるんだ？きみはどこに？

もう這えない。

両手両足でにじり上がるだけだ。

口と鼻をぴったり地面に着けないと空気がない。

こんな姿をきみには見せられないなあ。笑われる。

のろのろと上げた左手で上方を掴もうとして空を掴んだ。

瞬間的に左手に激痛を感じる。

慌てて引き戻した左手の先は炭になっていた。

骨まで炭化している。

そうか、とうとう火口に着いたんだ。でも、誰もいないじゃないかな
いか！

僕は裏切られた思いだった。

結局、死ななければきみには会えないのか。

みんな、すまない、とんでもない苦勞をさせて 遠回りをしただけなんて…。

今から、お詫びに行くよ…。

僕は最後の力を振り絞って立ち上がった。

地獄の劫火を見たのはほんの一瞬だった。

すぐに僕の目は焼け落ちた。

体がブスブスと音を立てて焦げていくのがわかる。

最後に、見えない目で、僕は、きみが笑顔で両手を広げているのを見た。

迎えに来てくれたんだね？

僕は気力で前に倒れ、身を投げた。

誕生

気が付くまでずいぶん時間がかかっていたと思う。

夢を見ていた。どこか暖かな南の方の海辺で、遠浅の砂浜、波間に揺られて漂っている。

とても気持ちがいい。

眠ってしまいそうだ。このまま永遠にこうしていたい。

僕を呼ぶ声がする。

遠くなった浜辺で小さな姿が手を降っていた。

誰かなと思ったが、 ああ、きみだ！

そこで、はっと目が覚めた。

目に入った状況は驚愕のものだったが、見え方もおかしかった。

百もの目で見ている感じ。この見え方を説明するのは難しい。

そういう器官を持っていない人間にはね。

とにかく、同時にいくつものものが見えて、しかも遠くまではつきり見える。

この目からは何者も逃れることはできない、と敵対する者は誰もが

恐怖をもって語るようになる。

僕が見たものは、目を焼かれて見えなくなる直前に見た地獄の劫火そのものだった。

僕は、ぐつぐつ煮え立つ溶岩の海にプカプカ浮かんでいたのだ。

僕は焦って手足をバタバタと動かした。

逃げようともがきながら、おかしいぞ、と思った。

逃げる暇なんかあるはずない、手や足があるなんて、こんな、灰も残るはずがないのに。

僕はいったいどうなったんだ？

もがくのをやめた僕は、流動する溶岩の海に身を任せた。

全然熱くないのが不思議だった。

ちょうどいい温度の風呂に入っている感じ。

ブクブクと沸き立つ泡が、マッサージのように僕の体に当たって気持ちいい。

しかし、見た目が溶岩なので混乱してしまっ。

ぞっとして身震いがした。

鱗がざわざわっと 鱗!?

僕は左手を上げ前に持って来てしげしげと見た。

左手は炭になってボロボロと崩れ落ちたのをはつきりと覚えている。

搔ぎ爪が生えてる。使いにくそうな手だ。て、これが僕の手！
？。

指は一応五本揃っているが、物は掴めても細かな作業はできそうにない。

手の甲から腕にかけて細かな鱗がびっしり生えている。

見ていると鱗が、ざわつと動いた。

人間だったときの鳥肌が立つのと同じような感覚だった。

爪の先から腕にかけて、色の基調はブロンズ色。

手の平は白っぽくなっている。

体はどうなんだろうと首を回して（異様に首が回るな）みると 翼
もう驚くのには慣れた。

さっきから感じていた不思議な感覚はこれだったのか。

両手がもう一對、付いている感じ。

動かしてみると翼がバタバタと動いた。

開いたり閉じたり。左を開いて次に右を開いて。

逞しい筋肉が付いている。

いかにも飛びそうな。

こもりの翼みたいに膜のある翼だが、強靱そうだ。

傍らの溶岩流に片方の翼を差し入れてみたが、どんなものでも焼いてしまいそうな溶岩が、膜の上でさら

さら流れるだけだった。

これは そう。竜だ。

伝説の竜の姿と一致している。

でも、伝説上の架空の存在だったはず。それが存在しているなんて。

しかも、それが僕!?

竜だったら火が吹けるかな、と思った僕は、口を開けて腹に力を込めた。

ひと吹きすると、自分でもびっくりするほどの太い凶悪なぐらいの炎が出た。

火を吹こうと思ったら、自然にお腹に力が入った。

どうい構造で火が出るんだろう?不思議だ。

お腹の中に力がモリモリと溜まっているのはわかる。それが火の源なのだろうけど。

しばらく僕は自分の新しい体を色々と試していたが、何のために火の山に来たのかを唐突に思い出した。

そうだ！きみだ！きみはどこにいるんだ！？

地獄の大釜、火の山の火口は結構広い場所だったが、僕以外に生きているものはいなかった。

ただ溶岩がぐらぐらと煮え立っているだけ。

僕ひとりだけだ。

逝ってしまった仲間の姿もない。

と、急に足元のずっと下の方から圧力が高まるのを感じる。

何かが来る！

溶岩が火口を上昇していき、僕も一緒に上がっていった。

大きな泡が、ごぼっ！と弾け、外側の冷えた溶岩を弾き飛ばす。

たくさん火の付いた岩が虚空に向かって飛んでいった。

ただの小噴火だ。

僕は顔にかかった溶岩を慣れぬ手つきで拭う。

竜の弱点は目だって誰が言ったんだ？

目の上にかかった溶岩を拭うときに僕はそう思った。

目自体は固い感じで少々のことでは傷つきそうになかった。

無論、痛くもない。

一応まぶたはあって、目をつぶることはできる。

そうそう、尻尾もある。結構自由に動かせる。

僕は尻尾で溶岩流を物憂げに叩きながら考えた。

いったいどこに行こう。あの湖に戻ってみようか。他に行くところなんてないし。

僕は、飛び立つことに決めた。

この翼で本当に飛び立てるのかな？

最初はゆっくり羽ばたきながら、次第に羽ばたきを早めた。

体が浮き上がっていくのがわかる。いけそうだ。

なんだか興奮してきた。

飛翔への予感が身を奮わせる。尻尾でばしばしと溶岩流を叩く。

それっ！

僕は翼を力いっぱい打ち下ろして飛び立った。

軽々と溶岩流を離れることができた。

羽ばたくたびに力が増し、みるみるうちに高度を稼いで火口の淵へ近づく。

そのまま、噴煙とガスの壁を突き抜けて、青い空へ飛び出した。

うわー！飛ぶってこんな感覚なんだ！

強い開放感があった。

空の真っ只中で、どこにでも移動できる！自由だー！

僕は叫んだ。竜は喋れないから、吼えた。

横転したり急降下や急上昇を繰り返した後、頭、背中、尻尾をピーンと伸ばして滑空するのが一番楽なの

を知った。

その姿勢を取ると、彼方の薄暗くけぶる空を目指す。

今度こそ…見つけるんだ！

永久に

どこまでも続く空を、僕はすっかり満喫しながら飛んでいた。

はるかな高みから眼下を眺める。見覚えのある町や丘や道が見える。

あれほど苦勞して踏破した数百リーグを、今度は一飛びで越えようとしている。

ある町を見出したときは、よっぽど寄って行こうかと思った。

その町にはひどく懐かしい顔がある。

竜になった僕を見たらびっくりするだろうな。

驚いて逃げるに違いない。

妙な悪戯心が疼いて仕方がなかったが、寄り道している暇はない。

もしも、もしかしてひょっとしてきみに会うことができたらどうなるだろうかと面々考えていた。

僕は竜できみは人間。

僕はもう人間の言葉を話すことはできない。唸ったり吼えたりするだけだ。

一番悲しいのは、きみを抱きしめられないことだ。

きみを抱きしめた記憶はもはや失われてしまったというのに、これからもその機会を失ってしまうこと

になるのか。

僕は、古く白っぽくなつた記憶の扉を開け、きみの姿を懸命に探し出す。

何度も何度も探したところだからあるはずがないとわかっている、かけらでいいからきみの記憶をよ

みがえらせて、今一度記憶に刻みつけておきたかった。

…柔らかなきみの体を力いっぱい抱きしめて、首すじに顔をうずめ、甘く芳しい髪の毛の匂いを心ゆくまで

楽しむ。

体を離してきみの笑顔を見、ああ！きみじゃない。

僕はきみにとても会いたいと思うのに、会うことに気後れする僕も感じる。

何よりも恐ろしいのは、竜になった僕をきみが愛してくれるのかどうか。

意気消沈してぼそぼそと飛んでいても、ついに、最後の望みの場所が見えるところまでやって来た。

年中、ぶ厚い霧の晴れない場所。

生き物の声もなくひっそりと静まりかえり、沈黙が支配する場所。

湖に続く道が一本見えるが、近くに住んでいる者は誰ひとりとして近づかない。

厚い霧のわずかな隙間から湖を臨んで僕は愕然とした。

あの湖は、こんなに黒い沼のような色をしていたのか？

竜の目だからこう見えるのか。

真の姿はこんな黒い邪悪なものだったんだ。

気配も感じるようになった。

禍々しい圧力を感じる。近づくに連れて更に圧力が増した。

人間だったときに、よくも僕はこんな場所で平然としていられたものだ。

でも、本能でこの水に入っただけにはいけないことをわかっていたんだな。

入れば死よりも恐ろしい結果が待ち受けていると。

少し離れた場所に、僕はすたとん着地した。

用心深くゆっくり近づく。

黒い湖面がうねうねと波打っているのがわかる。

明らかにこちらの存在に気がついている。

何者か、果たして人と言えるのかどうかわからないが、邪悪な意思が僕を迎え討とうとしている。

敵意が空気に満ち満ちて、僕の体がひりひりする。

強い力があるのも感じる。

僕の炎の力に対抗できるのか。

何が来るかわからないので、いつでも飛び立てるよう体制を整えながら湖面すれすれに炎を吹いた。

黒い湖面が驚いたかのように身じろぎする。

ぶるぶる震え、ついで盛大に立ち騒ぎだした。さあ来いとも言うように。

今度は湖面に直接吹いてみる。

炎の当たった湖面は、しゅーっと凄い音を上げて爆発的に蒸気化していったが、頑強に抵抗しているの

がよくわかった。

二度、三度と吹いて敵の力を試した後、次はもう少し強く吹いてみた。

後で考えてみると、敵はこの瞬間を狡猾に待っていたのだと思う。

強めに炎を吹いた瞬間、湖面からの圧力が一気に引き下がるのを感じた。

底まで一気に道が開き、僕の放った炎は苦もなく底まで届いた。

僕は見てしまった。見えすぎる目で。

きみの姿を！ほんの一瞬だけ。

きみが…白い姿のきみが…、迫り来る猛烈な炎に、あまりにもか弱い防御の手を上げ…一瞬にして燃え

上がり…蒸発するのを…。

僕は瞬時に発狂した。

矢のように飛び立った僕はきみのいた場所に舞い降り、きみを探した。

居ようはずがない。

この目で見たのだから。

黒い湖水が、地に染み込んだのか蒸発したのか跡形も無くなっていった。

強い敵意も雲散霧消していた。

跡を引いて消えていく満足げな暗い笑い声を聞いた気がした。

僕はほう喉し、盛大な炎をぶち上げ、辺りを焼き払った。

正体不明の敵を呪った。

きみのいた場所を掻き爪でかきむしって自分の体もかきむしって、泣いた。

竜は涙を流さないのです、心の中で血の涙を流した。

僕が！僕が！僕が！…この手できみを殺してしまった！

酷い喪失感に襲われて、僕は、どっつ！と力なく体を投げ出した。

なんのために、なんのために、竜にまでなって…。

僕は心の中で何かが折れるのを感じた。

不屈の闘志の源となっていた心棒を。

今度こそ確実に失ってしまった。

もうこの世界のどこにもきみはいない。

僕は、ばしんと音を立てて尻尾で力いっぱい地面をひっぱたいてから、真上に飛び上がった。

そのまま力の限り羽ばたいて、どんどん真上に上昇する。

先ほど、僕が荒れ狂っていたときに、体を掻き爪でかきむしって
て気がついた。

火にはあれほど強靱な鱗も、鋭い掻き爪で思い切り引っ掻けば、剥
がれて傷が付き血が出ることを。

竜の血も赤いんだと、暴風が渦巻く心の片隅で小さく驚いていた。

竜は不死身じゃない。死ぬこともできるんだ。

初めて自らの死を望んだ僕は、どこまでもどこまでも天空を駆け上
がった。

地平線が丸くなり、青かった空がどんどん暗くなって星が見え始め
た。

音が無くなる。

空気が薄くなって羽ばたいても上がれなくなったところで、ゆっく
り翼を閉じた。

体は今度は頭を下にして落ち始めた。

真っ逆様にどこまでも。

地上にある苦しみの無い平穏な世界を目指して。

音が戻ってきてごうごうと響き始める。

心の中は至極平穏だった。

楽しかったことばかりが次々と脳裏に浮かんでは消えた。

そのときに、ふと何かが心の表面にぽかっと浮かんできた。

あれっ？と思うと、途端に意図せず翼が開いた。

急激に落下スピードにブレーキがかかる。

翼の骨が軋んで、もぎ取られるような痛みが走った。

急カーブを描いて、僕は斜めから地面に突っ込んでいた。

かなり地上に近づいていたのだ。

僕は地面を深くえぐり、立木をいくつも弾け飛ばしてやっと止まった。

生きている。

激痛が体のあちこちを貫いたが生きていた。

僕の心の表面に浮かんだのは、僕は火の山で火口に身を投げたときに、体は蒸発したけど竜に成った

という考えだった。

ひょっとしてきみだって火の山に連れて行けば…。

もちろん、条件が全然厳しいのはわかっていた。

きみの体はあの黒い湖の場所で蒸発した。

拡散したかもしれないが、湖底だったあの場所の土に、きみは…染み込んでいるかもしれない。

望みはみるみる膨らんで、試さずにはいられなくなった。

僕の体は右側を下にして地面に激突したのだろう、右側がずたずたになって血まみれになっていた。

右目が見えないし右手も折れてダランと垂れ下がったままだ。

しかし、翼はしっかりたたんでいたおかげで大丈夫だった。

辺りを飛び回って、畑を耕しているひとりの農夫を見つけた。

僕の掻き爪は、土は掘れても袋に土を詰めるといっような作業はできない。

人間の手が必要だった。

すたとんと着地するつもりだったが、僕は少々フラついていて、農夫の目の前にどしんと着地してしまっ

た。

農夫は腰を抜かした。

這って逃げようとする農夫を口で押さえると、農夫は気絶してしま

った。

ちょうど鍬とズタ袋を持っていたので、手に鍬とズタ袋を持ち、農夫は傷つけないようそつと口にくわ

えた（竜は物を食べないのになぜか大きな口と牙がある）。

湖底だった場所で、農夫が目を覚ますのを待ってから、死ぬほど怯えている農夫になんとか納得させ

て、土を袋に詰めさせた。

終わってから、連れて帰ってやろうとくわえようとしたら、農夫は必死で抵抗した。

それでは返って傷付けてしまうので離してやったが、それほど家まで遠くはなかっただろうから帰りつ

けただろう。

そして、こうして僕は火の山の火口にいる。

手にズタ袋を提げて。

実際に土を袋に詰めてみると、きみが戻ってくるとは信じられなくなってきた。

こんな土がきみになるのか？と疑わしくなってくる。

百万にひとつぐらいの望みかもしれないが、試さないよりはずっと

まだ、と自分を納得させた。

ズタ袋を溶岩流に落とすと、一瞬炎が上がってしばらく跡が残っていたが、すぐにわからなくなった。

僕は待った。何日も溶岩に浸かりながら。

しかし何も起きない。

心配も無い。

ちなみに溶岩に浸かっていると、目や腕は徐々に再生してきた。

希望が膨らむ。

僕はある結論に達した。量が少ないんだきつと…。

農夫の前に二度目に姿を現すと、またか、やめてくれという顔をして農夫は逃げ出した。

僕は難なく捕まえた。

今度は三袋詰めさせた。

持ち帰って溶岩流に放り込み、何日も待ったが結局なんの効果も現れなかった。

こうなったら根こそぎだ。

三度目に行ってみると農夫は居ず、近くの家にも居なかった。

仕方がないので近くの町に行くと、数人の騎士が立ち向かってきた。鼻息で熱風を一吹き送ってやると、騎士たちは簡単に吹っ飛んで気絶した。

町で一騒動巻き起こした後、二人ほど捕まえて、大きな袋に詰めさせて持って行った。

効果無し。

四度目は、今度は数百人規模の、どこかの国の正規軍と思われる兵士たちが待っていた。

出来るだけ傷付けないよう蹴散らした後、將軍と思われる人物と身振りで談判して、やっと僕にして欲

しいことを理解してもらった。

彼は肝の据わった男だったな。

しかし、さぞ珍妙だったろうな。土を掘って袋に詰めると説明する竜なんて。

久しぶりに僕の心に小さな笑いが戻った。

協力してもらい、大きな袋三袋をなんとかぶら下げて持って帰った。

効果無し。

五度目、六度目。

彼らもずいぶんと協力的になって、一大工場のようになっていました。

大きな袋を三つぶら下げて何度も往復した。

七度目、八度目。

きっと奇妙な伝説になるだろう。農夫のまねをする竜。

九度目、十度目。

もう、湖底の表面にあった土はほとんど剥いでしまった。

僕は不機嫌な気持ちで溶岩流にプカプカ浮いている。

全く何の変化もない。

意気消沈してしまった。

死ぬ気力ももはや無くしてしまった。

このまま僕は火の山の主として、寿命が尽きるまで（あるのかな？）ひとりぼっちで過ごすことになる

のか。

火の山の伝説になるのかな。誰かがやって来たら、お前、喰い殺すぞ！があっ！

…僕は自嘲気味に薄く笑った。

そして、僕は今日も微かなきみの記憶と戯れて、いつ終わるともしれない微睡みの中にいる…。

飛翔

蚊がうるさくて眠れやしない…。

夢つつつの意識の中で、僕は唸った。

いつからか知らないが、ずっとブンブンいつているのだ。

小さな音だがひっきりなしだ。

南の島はこれだから困るんだよなあ、虫が多いから。

耳元まで蚊がやって来て、パチンと叩いたと思ったら、体がびくつと動いただけだった。

ああ、僕は夢を見ているんだと夢の中で思った。

意識が少しずつ現実に戻ってきて、ブンブンという音が言葉としてようやく聞こえ出した。

(ねえ) 誰だろ?(起きて)?

もう竜退治の騎士がやって来たのか。

ここはやはり重々しく、わしの眠りを妨げるのは誰じゃ?と言って、
一声吼えてから わしじゃ年寄り

臭いな。

やっぱり俺？

俺の眠りを妨げるのは（ねえ！起きてよ！）

そうだ、竜はしゃべれないんだっけ　しかし、女の挑戦者とは珍しい。

（起きてよ！私よ！）

私？誰？

僕はぱつちりと目を開いた。

そこには、金色に光り輝く小さな玉が浮かんでいた。

これって、きみ？（そう、私よ）

僕は完全に目が覚めた。

憂鬱は完全に消え去り、いきなり喜びが大爆発を起こした。

心の底から嬉しかった。

僕は溶岩流をばしゃばしゃ跳ね回って、千切れるかと思うぐらいぐるぐると尻尾を回した。

思うがままに喜びを表現してようやく落ち着いてから、僕は恐る恐る光の玉に鼻を近づけた。

それじゃあ、成功したんだ！やったー！

と再び喜ぼうとするよ、

(バツカねえ、あれは全部無駄だったわ。私が土の中にいるわけないじゃない)

ときみは軽蔑したように言った。

軽蔑したように言うが、ちょっとあきれた、しょうがないなっていう感じが暖かな感情に包まれてい

て…。

何か変だな？手に触れそうなくらい感情が感じられるんだけど…。

だいたい頭の中になんで声ができるんだろう？

(念話っていうのよ。私、魂のままであちこちふらふらしてたんだけど、霊媒師の人としゃべったとき

に、そう教えてもらったの。感情も直接送れるのよ)

それから、僕はきみがこれまで何をしてきたのかを長々と教えてもらった。

念話で話をしている間に、光の玉はどんどん大きくなってそれはそれは素晴らしい黄金色の竜へと形を

取り始めていた。

（あの囚われの湖の底でどうしようもなく泣いていたとき、私は本当に切望していたわ。

あの高みにある陽の光の中に上って行って外に出たいって。

あなたの投げしてくれた光の矢のおかげかもしれない、光の矢をぎゅーっと抱きしめて、あなたに会いた

い、会いたい、会いたい っでずーっと念じ続けているうちに、ある日、ふっと体が浮いたの。

それまで、ジャンプしたって絶対浮かなかったのに。

夢中で上に上がっていったわ。

明るい陽の光を全身いっぱいに浴びたときは本当に嬉しかった。

それから気が付いたの。私、ふわふわ浮かんでるわって。）

きみは、体を置いて魂だけになっていた。

本当のところ、なぜそんなことができたかはわからない。

魂は、体で動くように歩いたりはしない。

ふわふわ浮かんで移動するそうだ。

（ただ、馬に乗ってたり船に乗ってたりする人の魂に掴まっていたら同じように移動できる。

動物の魂も掴むことはできるけど、苦しそうにするからすぐ離しちゃう。

人間だって魂を掴まれたら何かしら気がつくわ。

あなたは ぜんっぜん気が付かないんだから！

超が付くぐらい鈍感よ。この鈍感男さん！)

僕があの湖畔で死ぬほどジタバタしていたときに、きみはすぐ横にいたんだね。

全く気が付かなかった。

きみがほとんど僕と同じぐらいの竜にまで成長したとき、僕はその美しさに見惚れてしまった。

光り輝くきみ、優美な首のライン、楔形のがっしりした頭、しなやかな尻尾、人間の言葉じゃ説明で

きないや。

竜の美しさは竜にしかわからない。

(うふ、私ってきれい?)

ああ、とてもきれいだよ。

ここで僕は、雷に打たれたようにびくっとした。

無くした物がいきなり目の前に転がっているのを見つけたような感じで、急に思い出したのだ。

(きみは サラ、サラだ。サラ！)

きみは サラは、考えるようなそぶり(感情)を見せながら、

(そう そうね。私の名前はサラ。サラだったと思う！)

ごめんね。あなたの名前を思い出せなくて)

僕は仲間からは最初、名無しとか呼ばれて、夢見る坊やとか、単に坊やとか呼ばれていたっけなあ。

(坊や！)

ちょっと！！その、勝手に声を聞くのはやめてくれない！？

(あら、コツを掴んだら隠せるわよ。感情もね)

本当だ。サラの感情が見えなくなった。

(コツを掴むまでは、あなたは私に嘘はつけないのよ)

サラの言葉の背景に、意地悪そうな笑いが浮かんでいた。

全くもう。サラはきつと年上だね。

(ま、年上だったら何だって言うの〜…)

やれやれ、早くコツを教えてください。

（私は、あなたが坊やって呼ばれているのは知っていたわよ。だいたいあなたにくつついていたから。

あなたが火の山の火口で身を投げたとき、私は悲しかった。行ってしまっただと思っ

て）人が死んだとき、魂はどこかに引っ張られて飛んでいくらしい。

サラが言うには火の山じゃないかと。

死者が集う山というのは本当だったのか？

（だから、火の山の火口だったら下の方に沈んで行ってしまっのかと思っ

て悲しかった。何かの方法でまた赤ちゃんになって戻ってくるんだらうけど、それは本質しか残っていないんだわ。

あなたの個性は永久に失われちゃう）

それが竜になった。サラも、なぜ僕が竜になったかはわからないそう

だ。そして、僕が黒の湖でサラを焼き殺してしまったとき。

（あれは確かに私の体だったけど、私じゃなかった。

たぶん黒い水が操っていたんだと思う。

体が無くなったら急に強い力で引っ張られ出した。

慌て私はあなたの魂にしがみついたの。

体は、魂にとってこの世界に留まるための碇ね。

それからあの急降下。

全くバカなんだから。

せつかくの竜の体を放棄したかったの？

私が一生懸命引っ張り上げなかったら、これで二度目よ

何が？一度目っていつのは？

（あなたが寝込みを襲われたとき…）

サラが言うには、危機的状況で僕の魂に直接働きかけようとしたことらしい。

一度目というのは、僕がまだ人間で火の山を目指していたときのことだ。

仲間の国が隣りの国と戦争をしていたときに、仲間のために僕も参加した。

それで僕のいた部隊が寝込みを急襲されたんだ。

間一髪だった。

あの時、直前に目が覚めなかったら殺されていた。

剣を取るのが精一杯だったから。

ひどい戦いだった。サラのおかげだったの？

（そうよ。叩いたり引っ張ったり、踏んで蹴ってやっと起きた。

急降下するときだって私が引っ張り上げたからあれだけの傷で助かった）

（ふうん…）

（ふうんじゃないの！）

サラの尻尾が飛んできて、僕を手ひどく、ばしっ！と叩いた。

実際、かなり痛かった。

（あ、ごめん、まだ尻尾の使い方に慣れてないから…）

一瞬、ペロっと舌を出しているサラの顔が、舌を出してって。

今の、人間のときのサラだね？もっと見せてよ！

また一瞬、ブロンドの髪がなびいている顔が見えたがすぐに消えた。

わかんないよ、もうちょっと長く…。

(いいじゃない、私はもう竜なんだから…)

サラの複眼が不思議な謎めいた光でぐるぐる渦巻いている。

…美しい。

(私はあなたの魂にしがみつきなながら、なぜか竜になれるって予期していたの。)

あなたが火の山の溶岩流にずっと浸かっけていてくれたら。

それを、あなたはバカなんだから無駄な土いじりをして 私がどれだけ待ったか 全くバカね！)

僕は、サラの尻尾が飛んでくるのを予期していたので尻尾で受け止め、絡みつかせた。

バカバカ言わないでよ。 あれ？ サラの目、おかしいよ、赤くなってる。

サラの首が僕の首に巻きついてきたので僕も負けじと首を巻いた。

首を巻きつけるのがひどく官能的なのに驚いた。

ぞくぞくする。鱗がざわめいて仕方がない。

そんなところを搔いちゃだめ。

僕も同じところを掻いてやろうとしたら、サラはぱっと飛び離れた。ついで優雅に飛び上がる。

初めてにしては上出来だ。

僕も飛び立とうとしたそのとき、突如重々しい声とともに黒々とした言葉が頭に浮かんできた。

交合飛翔…。

え、何？誰かいるの？

言葉はすぐに消え、答える者も誰もいない。

サラではない。

…ま、いいや。

僕は興奮を押さえ切れなくて、力いっぱい跳ね飛び羽ばたいて、もうはるかな高みにいるサラめがけて

まっしぐらに上昇した。

サラは太陽の光を浴びて、きらきら煌めきながらゆっくり飛んでいく。

僕の体の隅々から喜びが満ちあふれてきて駆け巡り、口から歓喜のほう喉となって飛び出した。

サラムも叫び返す。

歡喜の叫びは竜の歌となり、いつまでもどこまでも火の山の峰を越えて響き渡っていった。

おわり

飛翔（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか？

次作は、サラが魂となって放浪したときの話にしようかと思っています。

題名は「ふわふわサラ」（微笑）。

果たして心待ちにしてくれる方がいらっしやるかどうかわかりませんが、鋭意努力

します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1579t/>

繋がる魂

2011年5月10日19時51分発行